

居城へ帰れる夜には必ずCOM Pを開く。魔界は広くてなかなか戻れない事も多いし、遠出した後とはにかく眠って体力を回復したい。それでも目を閉じる前に見たい顔、聞きたい声がある。

『調子はどうだ?』

「順調だよ。まだ次の戦いまでは少しあるけど、魔界の他の魔王の領土からも天使の動きを察知したら教えてもらえるように約束を取りつけてきた」

『よくやった。連中の動きを把握しておくのは大切だからな』

「集団での戦いは情報を制する者が勝つ、だろ? 解ってるって」

参謀としてのナオヤは魔界へ行つたばかりの夕夜にまず魔界を知るべきだと教えた。ナオヤ自身は魔界へ来た事は無いのだが、悪魔に関する膨大な知識でいつもの確なアドバイスをしてくれる。無闇に戦うだけではなく交渉もつて魔界での賛同者を増やすという方法は夕夜の性にも合った。

カメラが固定されているらしくナオヤの顔は正面からしか見えない。無駄だと思いつつ手に持ったCOM Pを右へ左へと動かしてみるけれど、3D画像がぶれただけだった。サーバーとはリアルタイムでやりとりが出来るとはいえC

OMPの性能はパソコンには及ばない。受信した映像をそのまま保存する事は出来ないし、こちらには動画の撮影機能が無いからナオヤの見ているのは毎分ごとに撮影する細切れのような静止画像になる。ベッドに寝転んでだしな性格好で話しているのに気づかれて怒られるのもいつも数分遅れだ。

『他に何か困っている事は無いか?』

「大丈夫だよ」

ナオヤがインストールしてくれた音声通話機能もあまりいい音質とはいえず、調子が悪いと掠れたりぶつぶつ切れたりしてしまう。だけどこちらに来たばかりの頃のメールしか送れない日々には比べたらずつとましだ。こっちは慣れないCOM Pのタッチペンで必死に文章を打っているのに、ナオヤはああしろこうしろと返事を待たずに次々動画で送ってくる。あれにはかなりイライラさせられた。

戦闘時を除けば魔界での生活は想像していた程過酷ではなかった。最初の日は封鎖内と同じように野宿だったけど、すぐにベルの魔王を奉じる悪魔達が集まって身の回りを整えてくれた。

まだ居城と呼ぶにはささやかな本拠地だけど、配下の悪魔達にちゃんと守られているからこうやってゆつくりと通信してられる。